The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対人関係において他者からもたらされる居場所感 ：居場所感をもたらす人物の特徴による検討
Author(s)	益川, 優子
Citation	対人社会心理学研究. 2019, 19, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71967
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究 2019 年, 19 号, 1-7.
論文区分:資料

対人関係において他者からもたらされる居場所感 1)

―居場所感をもたらす人物の特徴による検討―

益川 優子(修文大学短期大学部)

本研究は、対人関係における居場所感について、他者からもたらされる居場所感に注目し、その要因を「居場所感をもたらす人物の特徴」から検討した。中学生・高校生の自由記述から得られた情報をもとに、対人関係において居場所感をもたらす人物の特徴を捉える項目を作成し、質問紙調査を行った。その結果, 対人関係において居場所感をもたらす人物の特徴として「自己存在感授与」、「指南授与」、「親近性」、「気軽さ」の 4 因子が抽出された。4 因子について、中学生・高校生の学校段階および性差による違いを検討したところ、高校生の「自己存在感授与」、「指南授与」、「気軽さ」の得点が有意に高く、女子の「自己存在感授与」、「指南授与」の得点も有意に高いことが明らかになった。「自己存在感授与」、「指南授与」、「親近性」、「気軽さ」は、中学生・高校生全般の「対人関係における居場所感」の要因を示唆していると考えられた。一方で、今後の課題として、対人関係において誰からも居場所感がもたらされていない者が必要としている居場所感を捉える必要性が示唆された。

キーワード: 対人関係、居場所感、中学生、高校生

問題と目的

居場所研究の始まり

近年、居場所研究が盛んに行われている。居場所は、不登校児童生徒の問題について、1992 年に文部科学省(当時の文科省)が提出した報告書を契機に注目された。報告書には「不登校は誰にでも起こりうるものである」という認識の必要性と予防的観点を持つ必要性が述べられていたことによって、不登校児童生徒に限らず、全ての児童生徒を対象とした研究が行われるようになった。

居場所に関する研究は、さまざまな研究領域において多様な観点から検討がなされ、今日に至るまで一定の研究成果が蓄積されてきた。しかしながら、さまざまな観点から研究が進められてきたがゆえに、居場所という概念について一定の定義がないという課題(中藤, 2011)がある。

対人関係における居場所感

これまで居場所研究において、居場所とは「他者との関わりの中で自分の位置と将来の方向性を確認できる場を意味する」(高塚, 2001)といった見解や、「共感的な他者との関係を通して個人が自己概念を再確認できること」(住田, 2003)といった見解が示されてきた。他者の存在との関係の中で自分の心のありようを確認していくことや、対人関係の中での居場所感を得ていく必要性を示唆している報告も多く見られる(田中, 2003; 住田, 2003; 石本, 2010a)。これらの先行研究の成果からも、居場所は他者とのかかわりの中において形成される要素が大きいといえよう。対人関係における居場所形成においては、当然ながら関係を形成する他者の性質が大きく影響している可能性があると考えられる。

対人関係と居場所感を扱った研究においては、居場所感と学校適応や精神的健康との関連の検討(杉本・庄司, 2006a; 則定, 2008a; 石本, 2010b)や特定の他者に対する居場所感の発達的変化の検討(則定, 2008b; 光元・岡本, 2010)が行われてきた。居場所は様々な機能を持ち、対人関係によって居場所の機能は異なること(杉本・庄司, 2006b)も明らかになっている。対人関係において居場所感を抱く対象についても、思春期までは家族が主であるが、青年期は家族や友人関係といったものが時期に応じて様々な居場所となる(富永・北山, 2003)ことが報告がされている。そのため、青年期における対人関係と居場所感を扱った研究は、家族や友人を中心とした特定の他者へ向けられた居場所感について研究が多く行われてきた。

これまでの対人関係における居場所感の研究は、前述したように、居場所の共通概念がないため、研究ごとに居場所の定義づけが行われ、その定義に基づいた感覚が居場所感として扱われて研究が進められてきた。対人関係と居場所感を検討した研究の多くは、居場所で得る感覚であれ、居場所だと認識する感覚であれ、個人の内発的な感覚が居場所感として扱われており、特定の他者を想定しない一般的な感覚や対人関係の中で形成される自己に注目した研究はほとんど見られない。他者との関係の中で自己の居場所感が形成されていくとすれば、対人関係における居場所感は「他者からもたらされる居場所感」が大きな影響を持つと考えられる。しかしながら、「他者からもたらされる一般的な居場所感とは、どのような性質を持つのか」という検討は、これまでの居場所研究ではなされてこなか

った。対人関係における居場所感を多角的な観点から検討していくためにも、自己―他者の関係において、他者から与えられる、すなわち外発的・受身的な観点から居場所感を捉えることも必要であると考えられる。

更に、特定の他者に対する居場所感の研究では、特定の他者に対して居場所感がもたらされていることを前提として、心理的な要因との関連や発達的変化の検討が行われてきた。これに対し、特定の他者を想定した居場所感に関する調査方法は、その対人関係に居場所を持たない者の感覚を捉え逃してしまう（西中, 2014）ことも指摘されている。特定の人のみから居場所感をもたらされている人もいれば、複数の人から居場所感をもたらされている人もいる。また、それぞれの他者からもたらされている居場所感の度合いも割合も違いがある。そのような違いをふまえ、本研究では、他者からもたらされる居場所感の共通した性質を抽出し、「対人関係において他者からもたらされる居場所感」を測定する前段階として、「居場所感はどのような特徴をもった人物によってもたらされるか」を把握する。対人関係において居場所感をもたらす人物の特徴を把握することで、対人関係において形成される居場感の性質に迫ることができると考えられる。

特定の他者に対する居場所感を捉えることは、特定の他者として立場が与えられた場合に、居場所感の形成や促進のために活用されることとなる。今日では、居場所形成への試みは全ての児童生徒に対して行われるべきものであるゆえに、ひいては児童生徒の特定の他者の立場に置かれた者だけではなく、誰もが児童生徒の居場所形成に関与する機会を持つ可能性があると考えられる。したがって、特定の他者の想定をせず、他者からもたらされる一般的な居場所感を把握することは、児童生徒を取り巻く周囲のあり方を示唆するものになり、児童生徒に対して多様な角度からの支援を可能にすると考えられる。

そこで、本研究では居場所感を物理的・空間的なものと区別するため、文部科学省(当時の文科省)によって 1992 年に提出された報告書に記載された「心の居場所」を参考に、「自己の存在感を実感でき精神的に安心していることができる」感覚を「居場所感」と定義し、「対人関係においてもたらされる居場所感」の性質を扱い、その抽出の前段階として「対人関係において居場所感をもたらす人物の特徴」について検討することを目的とする。

本研究では上記の目的を達成するために、居場所感をもたらす人物の特徴について中学生・高校生の学校種の差、性差についても検討を行う。青年期を対象とした居場所研究では、発達変化や、性差について検討したものが多く見られる（富永・北山, 2003; 秦, 2000; 則定, 2008b; 石本, 2010b)。これらの研究において、居場所感は発達段階によって異なるといった共通見解が示されているが、性差に関しては、母親と親友に対する居場所感は女性の方が高くなるといった性差が見られる(則定, 2008b; 光元・岡本, 2010)との報告がある一方で、中学生と大学生を対象とした居場所感の研究では、性差はない(石本, 2010b)と報告されている。このように発達段階や性別によって居場所感が異なることが示されているため、発達段階や性別による居場所感の違いを研究ごとに検討する必要があると考えられる。

更に、これまでの居場所感研究において、誰といる居場所を個人がどのようなバランスでいくつ所有しているのかを表す「居場所環境」(杉本・庄司, 2006a)が「なし」と回答している者でも、対人関係においてまったく居場所感が得られていないわけではないことも報告されている(益川, 2017)。したがって、居場所感を得られる対象者の有無を問わず、回答者全てを調査対象者とする。

方法

予備調査

予備調査では、中学生, 高校生の居場所感についてのイメージと居場所感を形成する人物の特徴を把握することを目的とし、2013 年 3 月に東海地方の 3 校の中学生 528 名、 6 校の高校生 81 名に対し、「居場所を得られる人物の具体的な特徴・性格」について自由記述で回答を求めた。得られた記述ついて心理学を専攻する教員3名、教育学を専攻する教員3名で検討を行い、同質内容を示す項目をまとめ、不適切な項目を削除した上で、「居場所感を形成してくれる人物の特徴」として 60 項目を選定した。

本調査

調査対象者 東海地方の 3 校の中学生、東北地方・関東地方・東海地方・関西地方・中国地方・九州地方の高等学校 13 校の高校生のうち、回答を中断していた者や性別不明者を除いた中学生 198 名(男子 96 名, 女子 102 名)、高校生 1230 名(男子 383 名, 女子 847 名)の合計 1428 名を分析対象者とした（平均年齢 16.37 歳, $SD = 1.33$)。

調査内容 居場所感をもたらす人の特徴について

予備調査で得られた情報をもとに、対人関係においてどのような特徴をもった人物に居場所感をもたらされるかを測定する「対人居場所感尺度」60 項目を作成した。60 項目について「人との関わりの中で居場所感をもたらす人の特徴」の度合いについて「非常にそう思

う」から「まったくそう思わない」の 4 件法で回答を求めた。

調査時期と手続き 調査は 2013 年 11 月下旬から 2014 年 2 月にかけて実施した。この際高校生において調査対象者の学年に著しい偏りが見られたため、2015 年 10 月に別の集団に依頼し、追加調査を実施した。調査は、調査対象者が所属する学級単位で、担任を調査実施者として、授業またはホームルームの時間を用いて集団で実施された。調査にあたっては、調査は無記名で行うこと、回答内容はデータとして扱われるため個人の回答内容は特定されないこと、回答は任意で行われること、回答しにくい項目があれば回答を中断してよいことを調査用紙の表紙に明記し、その旨を調査実施者より口頭でも伝えた。

結果

本研究の分析には、IBM SPSS Statistics(ver.20), Amos(Ver.21)を使用した。

因子分析

対人関係において居場所感をもたらす人物の特徴

居場所感を形成する人物像の特徴 60 項目に対して主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。スクリープロットの減衰状況により 4 因子が妥当であると考えられたため、4 因子を指定し、再度因子分析を行った。因子負荷量の絶対値が .40 未満の項目および複数の因子に高い負荷量を示す項目を削除して因子分析を繰り返し、最終的に 22 項目、4 因子が得られた。

第 1 因子は、自分の存在をありがたがってくれる人、自分を必要としてくれる人という特徴を表す項目であり「自己存在感授与」と命名した。第 2 因子は、悪いことをしたら注意してくれる人、ちゃんと怒ってくれる人、自分についてはっきり言ってくれる人、適切なアドバイスをくれる人という特徴を表す項目であり「指南授与」と命名した。第 3 因子は、よく話しかけてくれる人、話かけやすい人、話題が合う人という特徴を表す項目であり「親近性」と命名した。第 4 因子は、気軽に話せる人、気が合う人、気を使わなくてもよい人という特徴を表す項目であり「気軽さ」と命名した。

尺度の信頼性を検討するために、Cronbach の α 係数を算出したところ、「自己存在感授与」7 項目では $\alpha = .88$、「指南授与」6 項目では、$\alpha = .90$、「親近性」4 項目では $\alpha = .86$、「気軽さ」5 項目では $\alpha = .83$ であった(Table1)。

本研究の対象者とはまったく別の中学生 386 名、高校性 372 名に対し、同様の項目で調査を行い、探索的因子分析を実施した結果、ほぼ同様の因子構造になったため、4 因子を採択した。また、Cronbach の α 係数を算出したところ、「自己存在感授与」 $\alpha = .94$、「指南授与」 $\alpha = .91$、「親近性」 $\alpha = .91$、「気軽さ」 $\alpha = .95$ であったことから、対人居場所感尺度に一定の信頼性が確認された。

探索的因子分析で採択された 4 因子解 22 項目について、モデルを構成し、中学生・高校生及び男子・女子の集団間の因子不変性を検討するため、多母集団同時分析を行った。具体的な手順として, 川端(2007)に倣い、集団ごとのモデルの適合の検討、配置不変性の検討、測定不変性の検討の順に行った。

中学生群・高校生群、男子群・女子群の因子構造モデルの適合を確認した結果、中学生群は、χ^2 (203) = 485.17, $p < .001$, GFI = .82, AGFI = .77, CFI = .90, RMSEA = .08、高校生群は、χ^2(406) = 1801.37, $p < .001$, GFI = .90, AGFI = .87, CFI = .92, RMSEA = .05 であった。男子群は、χ^2(609) = 2458.14, $p < .001$, GFI = .89, AGFI = .87, CFI = .92, RMSEA = .04、女子群は、χ^2(812) = 3634.05, $p < .001$, GFI = .89, AGFI = .87, CFI = .92, RMSEA = .04 であった。高校生群、男子群、女子群の適合度は良好であり、中学生群の適合度は許容範囲内であると判断した。

配置不変モデルの適合度指標は、中学生群・高校生群では、χ^2(406) = 970.33, $p < .001$, GFI = .82, AGFI = .77, CFI = .90, RMSEA = .06, AIC = 1170.33、男子群・女子群では、χ^2(406) = 1832.68, $p < .001$, GFI = .89, AGFI = .87, CFI = .92, RMSEA = .05, AIC = 2032.68 であった。中学生群・高校生群、男子群・女子群の配置不変モデルの適合度も概ね良好であり、配置不変性が成立することが確認された。

因子負荷量に等値制約をかけた測定不変モデルの適合度指標は、中学生群・高校生群では、χ^2(406) = 970.33, $p < .001$, GFI = .82, AGFI = .78, CFI = .90, RMSEA = .06, AIC = 1134.33、男子群・女子群では、χ^2 (424) = 1857.37, $p < .001$, GFI = .89, AGFI = .87, CFI = .92, RMSEA = .05, AIC = 2021.37 であった。中学生・高校生群、男子群・女子群の AIC が配置不変モデルのもとでの値よりも小さくなっていることから、測定不変性が成立することが確認された。

そこで、中学生・高校生及び男子・女子を合わせたデータ(N = 1428)を用いて、4 つの潜在因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間の共分散が存在することを仮定したモデルで分析を行ったところ、χ^2 (164) = 1187.95, $p < .001$, GFI = .92, AGFI = .90, CFI = .94, RMSEA = .07 であり、一定水準の許容範囲内の適合度が得られた。

この結果より、対人関係において居場所感をもたら

す人物の特徴は、「自己存在感授与」、「指南授与」、「親近性」、「気軽さ」の 4 つの概念から構成されていると判断することが妥当であると判断した。

居場所感をもたらす人物の特徴の学校種差・性差について

中学生・高校生の対人居場所感の学校種の差および性差の検討のため、「対人居場所感」の下位尺度得点を従属変数とした、「2（学校種：中学，高校） × 2(性別：男性，女性)」の二要因分散分析を行った(Table2)。

その結果、全ての従属変数に対して交互作用は認められなかった。主効果の検定において、「自己存在感授与」、「指南授与」、「気軽さ」は高校生の得点が有意に高かった。「自己存在感授与」、「指南授与」は女子の得点が有意に高かった。

考察

対人関係において居場所感をもたらす人物の特徴について

本研究の目的は、対人関係において他者からもたらされる居場所感の検討の前段階として、「居場所感をもたらしている人物の特徴」を把握することであった。因子分析の結果、「自己存在感授与」、「指南授与」、「親近性」、「気軽さ」の 4 因子が抽出された。これまでの対人関係における居場所感を扱った先行研究では、「被受容感」(杉本・庄司, 2006b; 則定, 2006)、「精神的安定」、「行動の自由」、「思考・内省」、「自己肯定感」(杉本・庄司, 2006b)、「安心感」(富永・北山, 2003; 則定,

Table1　居場所感をもたらす人物の特徴の因子分析結果

項　　目	因子 F1	F2	F3	F4
自己存在感授与　α＝.88				
自分の存在をありがたがってくれる人	**.82**	-.02	-.13	.03
自分を必要としてくれる人	**.73**	.06	-.10	.10
自分のことを役に立っていると思ってくれる人	**.72**	-.08	.12	.00
自分のことを一番に考えてくれる人	**.66**	.02	.01	-.05
自分の能力を認めてくれる人	**.66**	.01	.11	-.03
自分がいることを喜んでくれる人	**.66**	.03	.07	.05
自分の意見を尊重してくれる人	**.59**	.03	.14	-.06
指南授与　α＝.90				
悪いことをしたら注意してくれる人	-.10	**.93**	.05	-.07
ちゃんと怒ってくれる人	-.02	**.86**	-.11	.01
自分についてはっきり言ってくれる人	.04	**.69**	-.04	.09
適切なアドバイスをくれる人	.08	**.63**	.26	-.14
本音を言ってくれる人	.05	**.60**	-.03	.21
悩みについて一緒に考えてくれる人	.18	**.55**	.10	.03
親近性　α＝.86				
よく話しかけてくれる人	.08	-.01	**.85**	-.08
話しかけやすい人	-.07	.01	**.80**	.11
話題が合う人	.06	-.08	**.57**	.25
優しい人	.05	.15	**.51**	.08
気軽さ　α＝.83				
気軽に話せる人	-.16	.01	.18	**.80**
気が合う人	.05	-.10	.15	**.72**
一緒に笑える人	.00	.09	.04	**.62**
気を使わなくてもよい人	.18	-.01	.01	**.55**
言いたいことを言い合える人	.16	.22	-.22	**.50**
因子間相関　F1		.68	.64	.68
F2			.57	.64
F3				.67

Table2 学校種・性別ごとの居場所感をもたらす人物の特徴の分散分析結果

	中学生		高校生		*F*値		
	男	女	男	女			
	96	102	383	847	学校種	性	交互作用
自己存在感授与	3.13 (0.65)	3.26 (0.62)	3.24 (0.60)	3.32 (0.56)	3.87*	4.96*	0.44
指南授与	3.36 (0.62)	3.36 (0.65)	3.37 (0.62)	3.55 (0.53)	5.75*	3.93*	3.9
親近性	3.50 (0.60)	3.45 (0.71)	3.41 (0.61)	3.47 (0.58)	0.56	0.02	1.15
気軽さ	3.53 (0.54)	3.52 (0.58)	3.55 (0.53)	3.67 (0.46)	4.58*	1.69	2.92

*p<.05

（ ）内は標準偏差を示す

2006)、「本来感」(則定, 2006)、「自己有用感」(石本, 2010b)等が居場所感として扱われてきた。

本研究で抽出された「自己存在感授与」は項目の内容から「自己有用感」の要素を含んでいると捉えることができる。不登校問題を発端とした 1992 年に文部科学省(当時の文部省)が提出した報告書においても、心の居場所とは「自己存在感を得られる」と記載されており、居場所感の要因として「自己存在感」は不可欠な要因であるといえる。

「指南授与」、「親近性」、「気軽さ」の項目は予備調査の自由記述から浮かびあがってきたものである。これらの要因は、これまでの先行研究の因子として抽出されてこなかった。「指南授与」については、これまでの居場所感の主な要因とされてきたような、他者との関係における安らぎのような要素だけではなく、相手からの意見や助言といった自己向上に関わる要素が必要とされていることが新たに示されたといえる。

本研究で抽出された「親近性」については、「よく話しかけてくれる人」、「話しかけやすい人」、「話題が合う人」、「優しい人」という項目からなっている。これらは、状況や話の内容について、相手に対する気遣いや遠慮を必要とすることなく「話」ができるという特徴があり、この特徴は、「気軽さ」における「気軽に話せる人」、「気を使わなくてもよい人」といった項目にも表れている。「気軽さ」には、対人関係が気軽に構築できるといった特徴に加え、「気が合う人」、「一緒に笑える人」といった共感的な要素を含んだ特徴を持っている。「親近性」と「気軽さ」は、対人関係を構築する上で心理的負担がないという点においては共通しているが、「親近性」は、「話」を媒介としたコミュニケーションを円滑に図ることができる意味を持つのに対し、「気軽さ」は、本音で話せる上に、その相手が自身と同じ感覚であるという意味を持つと考えられる。言い換えれば、「親近性」は「相手の顔色をうかがわなくても話ができる人」を指し、「気軽さ」は「本音を話せ、相手も自分と同じような感覚を持っていると感じられる人」を指していると考えられる。

これまでの対人関係に焦点をあてた居場所感研究において、本研究における「親近性」と類似の意味を持つ要素に「安心感」(富永・北山, 2003; 則定, 2006)、「気軽さ」と類似の意味を持つ要因として「本来感」(則定, 2006)がある。「安心感」、「本来感」ともに, 居場所感としてあらかじめ設定された感覚を問うたものである。「安心感」は対象となる人物に対して「ほっとする」、「安心する」といった内発的な感覚を測定したものである。それに対し、本研究で抽出された「親近性」は、一般的に居場所感をもたらす人物の特徴から捉えたものである。本研究の「親近性」は、他者と「話す」という限定された行動に付随する感覚であり、話しやすさに伴って生じる感覚である。「親近性」は、「安心感」に至るまでの途中過程の感覚を示していると考えられる。

また、「本来感」(則定, 2006)は、居場所の対象者に「ありのままでいられる」、「自分らしくいられる」といった感覚を測定したものである。本研究で抽出された「気軽さ」が「本音で話すことができる」という特徴を有している点では、「本来感」と同様の意味を持つといえる。しかし、「本来感」は「気軽さ」の持つ相手との共感が可能であるという特徴までは含んでいないため、「気軽さ」が「本来感」とまったく同様の意味を持っているとは言えない。

学校種差について

「自己存在感授与」、「指南授与」、「気軽さ」は、高校生の方が強く感じていることが明らかになった。青年期において、アイデンティティの獲得は発達課題とされ(Erikson, 1973)、青年期におけるアイデンティティの形成・確立とは、それまでの様々な同一化対象を、能

動的に取捨選択し秩序付け統合する過程(小此木, 2002)である。

中学生は自己の社会的現実において自己の定義付けが始まったばかりであるため、自己の存在感といった感覚が弱いことが考えられる。更に、中学生は、家庭のほか、クラスや部活動といった限定的な場を中心に対人関係を持つため、狭い対人世界の中で同一化の対象を取捨選択していく必要がある。そのため、自分を高めるための指摘や助言を与える他者も限定されるうえ、それらを与えてくれる限定された人物は、「親」や「教師」あるいは「先輩」といった年上の人物が想定され、「気軽」に話せる関係性を築けていないことも考えられる。また、他者に対する「甘え」という観点においても、自分の思いを満たしてくれない他者への不満や怒りをともなう特徴をもった「自己愛的甘え」(土居, 2001)についての自覚が高校生や大学生と比べて低い(稲垣, 2013)とされており、一般的な対人関係における居場所感についても、他者がもたらす感覚というよりは、他者が自分の思いや要求を満たしてくれているかどうかといった観点で他者を見る感覚が強いため、居場所感をもたらす人物の特徴が比較的低い得点であることが考えられる。

一方で、高校生は、中学生までは広く浅い友人関係であったものが、広く深い友人関係へと移行する時期(落合・佐藤, 1996)であるとされている。深まりを持った対人関係によって、取捨選択する同一化の対象も中学生と比較して、より多様性を持つと考えられる。また、その対人関係においてさまざまな摩擦を経験しながらも、自己と他者の個別性に気がつき、自己の存在意義や他者からもたらされている感覚についても明確に認識できるようになると考えられる。他者との関係によって自己の存在意義をもたらす感覚を得ることは青年にとってはきわめて重要なことであり、自己存在感をもたらしてくれる人物は、青年そのものを支えていると考えられる。また、アイデンティティを形成・確立している途中で抱えるさまざまな迷いや葛藤に対し、適切な助言を与え、自己の定義付けを指南してくれる存在も同様であると考えられる。

性差について

「自己存在感授与」、「指南授与」は、女子の方が強く感じていることが明らかになった。他者との関係における性差について、杉村(1998)は，男子は他者との競争、女子は愛着と親和を重視する傾向があると指摘している。杉村の指摘に鑑みれば、「自己存在感授与」や「指南授与」といった「授与」感覚は、競い合う状況では得られにくいため、男子の得点が低くなった可能性が高いと考えられる。一方で、愛着や親和を重視した対人関係を築く傾向のある女子にとって、対人関係を保持している他者からもたらされる感覚は、「自分のため」という意識が大きく働いていると考えられ、女子の得点が高くなったと考えられる。

本研究の「対人関係において居場所感をもたらす人物の特徴」は、調査対象者全ての回答を分析対象として抽出されたものである。回答者の中には、実際に居場所感をもたらす人物はいないと感じている者や人に対する居場所感をイメージできない者もいたであろう。この点について、人との関わりにおいて居場所感をもたらされていない者や、対象をはっきりと回答できない者の「対人関係における居場所感」のイメージも含めて捉えることができたと考えられ、一般化された「対人関係における居場所感」に迫ることができたと考えられる。その一方で、対人関係において誰からも居場所感をもたらされていない者が、対人関係の中でどういった居場所感を必要としているかを把握できていないという課題が残っている。これまでの対人関係を扱った居場所研究は、特定の他者と居場所感の関連を検討した研究が中心に行われていたため、居場所の対象者がいないという者の回答は扱われることがなかった。しかし、全ての児童生徒が居場所感を得られるようになるためには、対人関係において誰からも居場所感がもたらされていない者の居場所感を、どのような人物がどのようにして構築していくのかという問題を検討することが重要な課題となると考えられる。今後、誰からも居場所感がもたらされていない者が対人関係の中で必要としている居場所感に焦点を当てた検討が必要になると考えられる。

また、本研究で抽出された「居場所感をもたらす人物の特徴」の因子の意味を熟慮した上で、質問項目を修正し「対人関係における居場所感尺度」を作成していく必要がある。例えば、先行研究において、女子は他者との関係性について愛着や親和を重視する傾向が強い(杉村, 1998)という研究成果が見られるが、本研究の「親近性」には性差が見られなかった。「親和」と「親近性」といった類似性の高い言葉の性質の違いや背因を考慮し、因子名を検討するなど、再考が必要である。

引用文献

Erikson,E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W.W.Norton
(E.H.エリクソン 岩瀬 庸理(訳) (1973). アイデンティティ―青年と危機― 金沢文庫)

秦 彩子 (2000). 「心の居場所」と不登校の関連について 臨床教育心理学研究, *26*(1), 97-106.

稲垣 実果 (2013). 思春期・青年期における自己愛的甘えの発達的変化―自我同一性との関連から― 教育

心理学研究, *61* (1), 56-66.
石本 雄真 (2010a). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所―精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から― カウンセリング研究, *43* (1), 72-78.
石本 雄真 (2010b). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, *21* (3), 278-286.
川端一光 (2007). 多母集団分析 豊田 秀樹(編) 共分散構造分析 Amos 編―構造方程式モデリング― (pp.73-87) 東京図書
光元 麻世 ・ 岡本 祐子 (2010). 青年期における心理的居場所に関する研究―心理社会的発達の視点から― 広島大学心理学研究, *10*, 229-243.
益川 優子 (2017). 中学生の居場所と生活感情の関連―対人関係における居場所感― 日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集, p.567.
文部省初等中等教育局 (1992). 学校不適応対策調査研究協力者会議 登校拒否(不登校)について：児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して
中藤 信哉 (2011). 青年期における居場所についての研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, *57*, 153-165.
西中 華子 (2014). 児童期・青年期における居場所に関する一考察―居場所感の視点から― 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, *8* (1), 151-164.
則定 百合子 (2006). 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集, *49*, p.337.
則定 百合子 (2008a). 中学生の心理的居場所感および学校適応が精神的健康に与える影響 運動・健康教育研究, *16* (1), 2-8.
則定 百合子 (2008b). 青年期における心理的居場所感の発達的変化 カウンセリング研究, *41* (1), 64-72.
落合 良行 ・ 佐藤 有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, *44* (1), 55-65.
小此木 啓吾 (2002). 現代の精神分析―フロイトからフロイト以降へ― 講談社
住田 正樹 (2003). 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田 正樹 ・ 南 博文(編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp. 3-17) 九州大学出版会
杉村 和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成―関係性の観点からのとらえ直し― 発達心理学研究, *9* (1), 45-55.
杉本 希映 ・ 庄司 一子 (2006a). 中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究 学校心理学研究, *6* (1), 31-39.
杉本 希映 ・ 庄司 一子 (2006b). 居場所の心理的機能の構造とその発達的変化 教育心理学研究, *54* (3), 289-299.
高塚 雄介 (2001). 心理学から見た「居」場所 田中治彦(編) 子ども・若者の「居場所の構想」―「教育」から「関わりの場」へ― (pp.36-50) 学陽書房
田中 理恵 (2003). 居場所としての家族・仲間集団と子どもの対人関係 住田正樹 ・ 南 博文(編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp.203-228) 九州大学出版会
富永 幹人 ・ 北山 修 (2003). 青年期と「居場所」 住田正樹 ・ 南 博文(編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp. 381-400) 九州大学出版会
土居 健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂

註

1) 本研究結果の一部は, 日本発達心理学会第 27 回大会(2016)で発表された。

A study of the feeling of *Ibasho* brought from others in interpersonal relationships：

Consideration about the characteristics of the person who create the feeling of *Ibasho*

Yuko MASUKAWA (*Shubun University junior college*)

The feeling of *Ibasho* in interpersonal relationships was examined in this study, as well as its factors based on "characteristics of people who create the feeling of *Ibasho*" by paying attention to the feeling of *Ibasho* brought from others. Based on information obtained from comments by middle school and high school students, items to capture the characteristics of people who create the feeling of *Ibasho* in interpersonal relationships were prepared to conduct a questionnaire survey. As a result, four factors were extracted including "giving the sense of self-existence", "giving instruction", "closeness" and "easiness" as characteristics of people who create the feeling of *Ibasho* in interpersonal relationships. When differences by grade level and gender of middle school and high school students were examined in regards to these four factors, scores for "giving the sense of self-existence", "giving instruction" and "easiness" were significantly high for high school students, and scores for "giving the sense of self-existence" and "giving instruction" were significantly high for female students. It is considered that "Giving the sense of self-existence", "Giving instructions", "Closeness" and "Easiness" are common factors related to the feeling of *Ibasho* in interpersonal relationships of junior high and senior high school students. In the future, it would be necessary to examine the feeling of *Ibasho* needed by individuals who do not receive such feelings from others in interpersonal relationships.

Keywords: interpersonal relationships, feeling of *Ibasho*, middle school students, high school students.